



本日はよくお参り下さいました

梅雨明けはいつになるでしょうか？今月は三浦富士浅間神社のお焚き上げがあります。これは三浦富士(標高183メートル)を富士山に見立てた山岳信仰の一つで、富士山の浅間神社のご分霊がまつられる祠(ほくら)の前で、早朝より一日中、白装束の先達(せんだつ)によって家内安全、大漁満足、五穀豊穰などを祈願するお焚き上げと呼ばれる護摩祈禱を行います。江戸時代から伝わるこの伝統行事には毎年約200人の地元の方々の参拝でにぎわいます。とはいえ、参拝者の高齢化が進み、残念なことに年々参拝者数は減っています。一人でも多くの皆さんに足を運んで頂けたら幸いです。お天気がよければ、西に富士山を見ることができ、津久井浜から三浦富士、砲台山、武山を巡るハイキングコースも整備されています。当日は氏子役員さんのご協力により「おもっこ(赤飯)」「しいっぱ(お祓いの力のある椎の木の枝の御幣)、お焚き上げで使われた「清め塩」が有料でお求め頂けます。どうぞ皆さま動きやすい服装でお出かけ下さい。権禰宜 道子



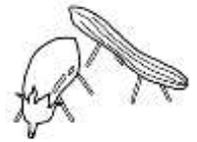
七夕ですわ

7月

1日月首祭 月の初めの恒例祭祀。小祭。
7日七夕 8日三浦富士浅間神社お焚き上げ左記参照。13日～15日 お盆
15日月次祭 月の半ばの恒例祭祀。小祭。

お盆豆知識・・・この辺りでは7月

13日から15日の三日間です。地区によっては8月13日から15日がお盆になりますが久里浜の八幡・久村地区では7月で定着しています。お盆は日本古来の先祖祭祀がもたっています。ところが、江戸時代に入り、幕府が檀家制度により庶民の先祖供養まで仏式で行うよう強制したため、お盆が仏教だけの行事と誤解されて現在にまで至っています。神道の家庭でも、お盆の期間中は、自宅の御霊舎(祖霊社)を清めて、季節の物などをお供えし、家族揃ってご先祖様をおまつりします。我が国では、古くから神まつりとともにご先祖様の御霊をおまつりする祖霊祭祀が行われ、神と祖霊の加護により平安な生活を過ごしてきました。この神とは、自らとつながりのあるご先祖様が徐々に昇華して神となったご存在です。参考『神道いろは』。



キウリとナスで作った馬と牛

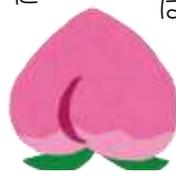
ご先祖様が行き来に使う乗り物と考えられています。

日本神話の世界 全十一回

第四回 「黄泉の国へ」

伊邪那岐命は、亡き妻、伊邪那美命に会うため、黄泉の国に行き、伊邪那美命に再会します。伊邪那岐命が「愛しい妻よ、一緒に帰ろう」というと、伊邪那美命は「私は黄泉の国の食べ物を食べたのでこの世界の住人になってしまいました。でもなんとか帰れるよう黄泉の国の神々と相談してまいりますので、その間、決して私を見ないと約束して下さい。」と言い残して伊邪那美命は御殿の奥に入りました。長い時間が過ぎ、待ちかねた伊邪那岐命は、髪にさした櫛を抜きその太い歯を折って一火を灯しました。すると目に飛び込んできたのは、腐敗してつじにまみれた横たわる伊邪那美命でした。伊邪那美命の体には恐ろしい雷の神が八柱も成り出ていました。伊邪那岐命はびびりして逃げました。亡き妻は「私に恥をかかせたな」といって黄泉の国の醜女(しこめ)に後を追わせました。伊邪那岐命は必死に逃げ続け、ようやく黄泉の国と現実の世界の境にあたる黄泉比良坂(よもつひらさか)に差し掛かり、そこに一本の桃の木を見つけます。急いで桃の実を三個取り、投げつけると、悪霊たちはすつかり勢いを失い、逃げ帰りました。桃の実に命を助けられた伊邪那岐命は、桃の実に感謝し、名を与えました。すると最後に伊邪那美命自身が追いかけてきました。伊邪那岐命は、千人がかりでようやく

動かせるという巨大な岩で黄泉比良坂を塞ぎ、岩を隔てて、絶縁の言葉を言いました。伊邪那美命は「そうするのなら、あなたの国の人々を一日千人しめころしなさい。」といい、伊邪那岐命は「ならば私は一日に千五百の産屋を建てよう」と宣言しました。こうしてこの国では、一日に必ず千人が死に、千五百人が生まれることになりました。このように、伊邪那美命は黄泉の大蛇として、伊邪那岐命は現世(うつしよ)の大蛇として全く別の道をお進みになることになったのです。参考文献『神話のおへ』



おほかむずみのみこと 意富加牟豆美命

天神さまの豆知識

くすみのお火

『日本書紀』の「一書(あるふみ)」には、そこには「今世の人、夜一火灯すこと忌む」とあります。黄泉の国で伊邪那岐命が一火を灯し変わり果てた伊邪那美命の姿をご覧になったことが原因で、一火を灯すことをなるべく避けるようになったということです。確かに現在でも神棚や仏壇などでは一つではなく原則として2つの火を灯します。夜に一つ火を灯すとあの世のものが見えるとも考えられています。参考文献『現代語古事記』竹田恒泰著

